

2017年度 須磨学園中学校 入学試験問題 第1回

国語 出題意図

全体について

2017年度の問題作成にあたり、須磨学園のスローガンである「to be myself,...」に基づき、従来の方針や様式を継承しつつ、受験者の学力を検出できるよう配慮した。また、「知識を中心とした漏れのない基礎力」に基づき、「内容・表現・心情について深く思考し表現できる応用力」をどれだけバランス良く兼備しているのかを判定できる試験問題を目指した。

以下は、問題作成担当として、留意した点である。

- (1) 問題は、昨年同様に3問構成とし、「小問集合」「説明文」「小説文」の配列とし、150点の配点、60分の問題とした。
- (2) 出題範囲と問題構成は、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な力が反映されるよう配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように構成し、各設問の難易度のバランスを考え、識別力のある問題となるよう留意した。
- (3) 問題文や設問及び選択肢の吟味には、上記の学力を問うものなるよう細心の注意を払うとともに、リード文や注は受験者の理解の一助となるよう工夫した。

各問題について



問一 「調べる」という勉強における基本的習慣が身についているかどうかを試す問題である。

問二 畳語に関する知識問題だが、単なる知識の確認に留まらず、その言葉の持つ語感を適切に把握しているかどうかを試す問題である。

問三 自己表現において、最も本質的な心情語の知識を確認する問題である。具体的な状況に対応した語を選ばせるという設問の工夫を施すことで、知識の活用力を問うている。

問四 漢字の持つ意味の広がりをもとに、漢和辞典に親しんでいるかどうかを確認した問題。間接的に、普段から漢和辞典に親しんでいるかどうかを試している。

問五 敬語の理解を問うた問題。敬語を用いた例文の正否を考えさせることで、習得知識を適切に運用できているかどうかを試している。

問六 句読点を付ける問題。文の意味の切れ目を適切に把握できているかどうかを試し、間接的には読解力の有無を問うている。

㊦ 学問を含め、広く技芸における伝統継承のあるべき姿を、後継者の育成に失敗したとする筆者の強い悔恨と対比しながら、情感豊かに述べた文章である。筆者は著名な書き手ではあるが、技芸継承の意義について、個人的達成ではなく、後継者を熱心に育て、伝統を次世代へと継承するものだとする考えは、学問の継承の一端を担う教育機関として、本校の教育や学問に対する理解なり姿勢を示す、最適な文章だと判断し、出題した。

出典 内田樹「旦那芸について」

問一 漢字の書き取り問題。基礎知識の確認であると同時に、受験生にとって耳慣れないと思われる語については、試験会場という緊張しがちな場において、前後の文脈から冷静に類推できるかどうかという、間接的な読解力も併せて問うている。

問二 カッコにあてはまる語を選ぶ問題。選択肢の言葉の持つ語感を適切に理解できているかどうか、また、前後の文脈を適切に把握する論理的思考を確認している。

問三 文脈に合わせて慣用句を埋める問題。四字熟語の知識を含め、文章を読み解くための基礎となる語彙力の有無を問うた。

問四 カタカナ表記の外来語が氾濫する昨今において、何となくの意味ではなく、正確な意味を把握しているかどうかを試す問題。普段耳にする語でも、分からないことは積極的に調べてみるという、受験生の普段の学習姿勢を垣間見ることができる問題なのではないかと考える。

問五 技芸の伝承に関する、本文の導入部分の理解を問うた。問題文の論旨展開に受験者を適切に招き入れるための問題でもあった。傍線部の「裾野」の意味する内容を、前後の段落から推測する読解力を試している。

問六 伝統継承に関わる仕事を怠るべきではなかったと筆者が判断するまでの過程を問うた問題。ここで理由を問うた場合、傍線部の後の段落も参照する必要があると判断し、ここでは解答の根拠となる範囲を傍線部の前の内容に限定するために、「そのように考える原因」と問い方を工夫した。

問七 傍線部の表現に込められた心情を把握する問題。額面通りの言葉の理解ではなく、その表現に込められた意図なり心情を、傍線部の前後の内容と関わらせながら理解できるかどうかを問うている。

問八 傍線部内の指示内容を適切に対応させる問題。難易度としては高くないが、結論部までの受験生の理解を整理し、次の記述問題につなげてゆくための誘導問題として設定した。

問九 反復表現に着目し、そこに込められた筆者の心情を把握する問題。100字以上の字数を設定することで、受験生の思考力・表現力・答案構成力を問うた。最終的には本文全体の内容を踏まえる必要があるが、傍線部内の指示語を手がかりに、順序を追って答案を構成してゆく堅実な手つきが備わっているかどうかを測ることができるのではないかと考える。

㊦ 東日本大震災の発生から6年経とうとしている現代において、東北出身で、東北に暮らす筆者が、「仙河海市」という架空の街の舞台に、環境の変化を強いられた市井の人々の生きる姿を活写した、震災からの再生の物語である。震災の記憶を風化させることなく、被災地に生きる、自分たちとはまったく境遇の異なる他者に少しでも思いを馳せてほしいという意図から、この文章を出題した。

出典 熊谷達也「希望のランナー」（『希望の海 仙河海叙景』所収）

問一 慣用句の知識を問うた問題。言葉と意味との一対一の理解ではなく、その慣用句を用いた適切な例文を選ばせる工夫を施すことで、知識を自分なりに活用できるかどうかを試している。

問二 空欄に適語を補充する問題。選択肢の各語の語感を適切に理解できているかどうか、また、前後の文脈を適切に把握する論理的思考を問うている。

問三 傍線部の描写から、「希」の心情を推し量る問題。冒頭の被災地の状況を理解し、受験生が円滑に作品世界へと読み進めるための導入問題である。文脈を踏まえつつ、傍線部と該当箇所を適切に関連づける理解力を確かめている。

問四 作品中盤の「希」の心情を把握する問題。傍線部に至る心情を把握した上で、「頭を振る」という動作が、慣用的にどのような心情を示すものなのかを理解できているかどうかを問うた。

問五 坂道を登りきった「希」の心情を把握する問題。傍線部に至る「希」の人物像について触れられた箇所を的確に押さえつつ、傍線部の「満足感」を覚えるに至った心情理由を把握できているかどうかを確認している。

問六 傍線部の「希」の心情を説明する問題。傍線部自体は短く簡素な内容ではあるが、「でも」という接続語にも傍線を引いているため、答案の作成においては、前後の文脈を参照しつつ、豊かな表現力や答案構成力を要求する問題となった。

問七 文脈を踏まえ、空欄内容を創作する問題。慎重に文脈をたどる力に加え、発展的には、「希」が自分のことをどのように認識しているかという呼称表現を答案に盛り込んでいるかどうかまで確認できる、深い読解力が反映される問題となった。